

文化財センター通信

【かざぐるま】

風車

第 18 号



紀州の歴史と文化の風

財団法人 和歌山県文化財センター

連続特集

重要文化財 福勝寺 その3

棟札と墨書が語る建物の歴史
保存修理工事を進めている福勝寺からの報告です。

福

勝寺の保存修理現場では、本格的な解体工事が進み、平成十八年一月には、補修に必要な解体作業を

全て完了する予定です。詳細な調査により、本堂や求聞持堂について、建物の変遷や、歴史的な背景など様々なことがわかってきました。今回は、建物の歴史を知る上で大きな手掛かりとなる、棟札類や墨書を紹介します。

建

物の建立や修理時期を知る一番の資料は棟札です。棟札とは建物の建立や修理を行った際、木の板



求聞持堂建立棟札・慶安3年

に年号、施主や棟梁など建設に携わった人の名前を記して、屋根裏の棟木

などに打ち付けたものです。福勝寺でも求聞持堂には建立棟札・慶安三年

(一六五〇)が残り、紀州藩初代藩主徳川頼宣の寄進で建てられたことが確認

できるほか、寛文二年(一六六二)、享保十九年(一七三四)、天保七年

(二八三六)の本堂や求聞持堂の修理棟札が残されています。しかし、残念

なことに本堂には建立棟札が残っており、建てられた時期は不明です。



修理のため解体作業中の本堂

建

物には棟札のほかにも様々な書き付けが残されており、これらを墨書と呼称します。解体に伴い屋根裏や部材が取り合う部分など普段目に

— 第 18 号の主な内容 —

1. 連続特集 重要文化財福勝寺 その3
2. コラム「古建築修理の散歩道」
保存図とは何か
3. 中筋家の修理現場から
玄関の穴の不思議



本堂内部修験者墨書・弘治3年



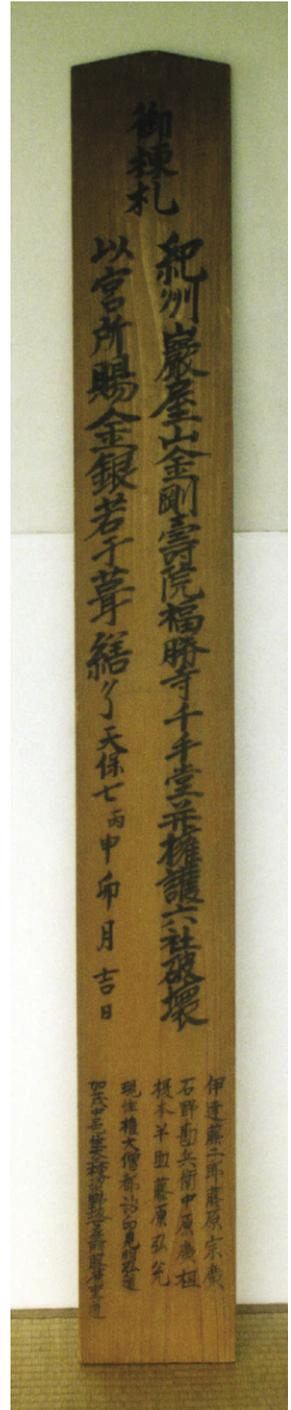
本堂天井板墨書・永禄13年



本堂大工墨書・天保7年



本堂内部墨書・永正12年



本堂修理棟札・天保7年



本堂内部墨書の状況

することが出来ない場所に、大工の書き付けが多数見つかり、寛文や天保の修理規模や棟梁の名前などが確認できました。

建物の部材を詳しく調べた結果、建立当初本堂の正面などは壁や建具が未完成であったことがわかりました。これを反映してか、本堂内部の

柱や壁には参詣者や修験者による無数の墨書が残ります。これらの多くは室町時代後期に書かれた物ですが、確認できる一番古い年号は、外陣内部の壁板に記された永正十二年（一五一五）で、本堂はこれ以前に建てられたことがわかります。

また、本堂内陣の天井板裏面に永禄十三年（一五七〇）の墨書が発見され、願主（施主）や大工の名も確認できました。願主の子孫に伝わる古文書には、室町時代末期に福勝寺を再興したとの記録があり、この時によりやく本堂の未完成部分が整えられたと考えられます。

このほか、張り壁の下地に用いられていた古新聞の日付から、求聞持堂の増改築が大正八年（一九一九）に行われたことが判明するなど、直接的な記録以外の史料も丹念に調査することにより、建物の歴史が鮮明に浮かび上がってきます。

次回は調査により判明した成果をもとに、本堂と求聞持堂を江戸初期の姿に復原する、現状変更の内容について紹介します。（多井 忠嗣）

保存図とは何か

文化財建造物の保存修理工事では、修理の記録として報告書が作成されます。また、これと併行して保存図が作成され、報告書に掲載されています。

保存図とは、永年保存を前提として、全紙大のケント紙に烏口で墨入れされた建築図面であり、そのほとんどが修理前と修理後のそれぞれの姿を描いたものです。保存図には、明治30年の古社寺保存法（現在の文化財保護法）の成立以降、修理工事ごとに作成されてきた伝統と歴史があります。

修理に際して、現場では間取りや構造、痕跡、各部材についての詳細な調査・記録を行います。そこから建物の歴史や変遷をたどることが出来ます。保存図はこの記録を基に、A0版のケント紙に鉛筆書きで描き上げていきます。その後、烏口で墨入れを行い、繊細な直線や曲線で描かれた図面が完成します。種類には、平面図、断面図、立面図、見上図、矩計図、規矩図、詳細図などがあり、現状変更を行った場合は、修理前と修理後を一枚ずつ描くことになります。

完成した図面を見ると、相当な時間と手間がかかっていることもあり、図面としての正確さや情報の多さに加え、美しさが目をひきます。いかにうまくレイアウトをするか、いかに要点を外すことなく詳細な情報を載せていくかにより、見栄えや密度が変わってきます。

旧中筋家住宅修理工事でも、業務の一つに保存図の作成があります。主屋をはじめ付属屋5棟が指定文化財となっているため、各々について図面を作成しています。当家では現状変更も多く、保存図の累計枚数は60枚以上に及びます。多くの図面を効率よく描くため、実測した野帳を一旦CAD（パソコンの製図ソフト）で図面化して、全体を構成した後、ケント紙に手書きで起こすという方法をとっています。

保存図を描く目的とは何か。また、CADが普及した今もなぜ手書きなのか。ということに疑問をもたれるかもしれません。実際、議論もなされているようです。

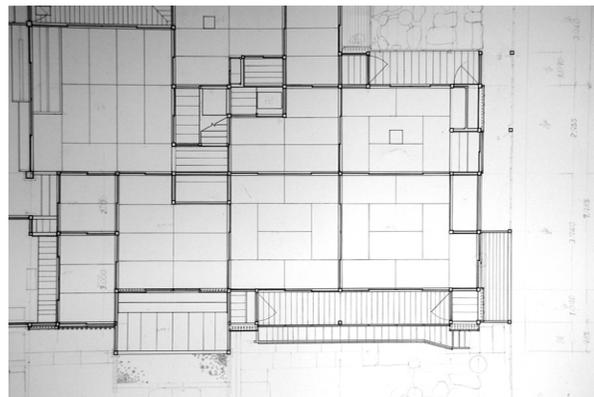
建物一棟を解体修理する場合など、調査資料は膨大な量になります。それを整理するためにも、修理記録としての保存図を作成することは必要であると思われます。また、現在矩計図を作成していますが、構造や納まりについて多くの学ぶべきことがあります。実際に現場を見て実測をすること、手書きで図面を起こすことにより、建物に対する理解を深めることが出来ます。ここに手書きの意義があると言えるのではないのでしょうか。

（稲田 朋実）

参考文献：飛鳥資料館『A0の記憶』2002.10.5



保存図を描くための製図道具たち



墨入れ途中の保存図（中筋家住宅）

玄関の穴の不思議

現代では、家の入り口の通称は「玄関」です。マンションでも一戸建てでも、古くても新しくても、入り口を玄関と呼んでいますね。しかしながら近世までは、玄関という語は、家の入り口を指すものではなく、来訪する上客専用の特別な入り口のことでした。家の人は、玄関とは別に設けられた入り口から家に入ったのです。伝統的な玄関は間口が一間(約2m)から二間(約4m)あって、横棧の沢山入った舞良戸を建てるのが普通です。凝った玄関では、式台しきだいといって地面の高さをすれすれに框を入れて低い床板を張り、踏み段を上がつて座敷へ入るように造っています。

大庄屋であった中筋家住宅にも式台玄関があって、家の正面中央に突き出すように造られています。総ケヤキ造りの豪華なものです。修理のために玄関の床を解体してみると、床下の地面に深い穴が掘られていることがわかりました。構造上必要のようではなく、

用途不明の謎の掘り込みです。実はこの穴は中筋家の玄関に限らず、澤井家住宅(重文・京都府)や高林家(重文・大阪府)の玄関にも見られるのです。

玄関の床下に穴を掘った理由については、いくつか説が出ました。一つは玄関に上がったときに床の反響が良いように掘ったという説。もう一つは施工上、必要であったという説。もう一つは地面から床板を遠ざけて板が湿気ないようにしたという説です。

中筋家主屋の修理は順調に進んでおり、式台玄関の床板張りにもいよいよ取りかかりました。組上げ担当は大工の福地稔さんです。玄関は雨漏りがひどかったので、床板はすべて取り替えることになりましたが、板の張り方じたいは昔と同じように組み上げていきます。厚いケヤキの床板は、あとで反ってこないように、裏側に吸い付き棧という棧木を取り付けます。その反り止めの吸い付き棧を取り付けてから、根太に釘止めしていきます。

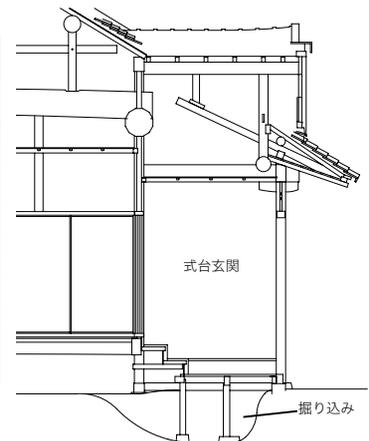
式台玄関は床の間とともに、家の見せ場の一つなので、精緻に美しく組み上げます。それには床板裏面の吸い付き棧の位置や取り付け具合を、入念に調整する必要があります。福地さんに、もし式台の地面に穴がなかったらどう?と聞いてみると、「やりづらい」という返事。正解は江戸時代の大工に聞かないことにはわからないのかもしれませんが、どうやら式台玄関床下の謎の掘り込みは、地面すれすれに床板を張るために必要な作業空間であったようです。(御船 達雄)



旧中筋家住宅主屋の式台玄関(修理前)



床下の穴に入って床板裏面の調整作業



中筋家住宅式台部分の断面図

風車 第18号

平成17年12月26日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404 和歌山市湊571-1

tel. 073-433-3843

fax. 073-425-4595

e-mail maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>